



地域の森林と学校

写真1 森林を学ぶ高校生達による林業体験指導

多摩森林科学園 主任研究員 井上真理子

森林の文化的サービスのひとつに教育があげられます。人々は長きにわたって木材など森林の利用を通して暮らしを成り立たせると同時に、自然との関わり方を学んできました。しかし、化石エネルギーの普及とともに、エネルギー資源としての薪炭の利用が減少し、身近な森林との関係も希薄になってしまいました。

人々が森林との関係を学ぶ機会を得ることが以前と比べて難しくなる中、「森のようちえん」のように、毎日の活動を森林など自然の中で行うような試みが、教育の分野で見られるようになってきました。小・中学校の義務教育においても、林業体験を授業に取り込んだり、地元の木材を使った机や食器を学校生活に取り入れたりする例が見られます。学校教育の中で身近な森林にふれ社会との関係を学ぶことは、子どもたちが持続可能な社会の一員として成長するための大きな助けとなっています。

義務教育からはなれ、高等学校に目を向け

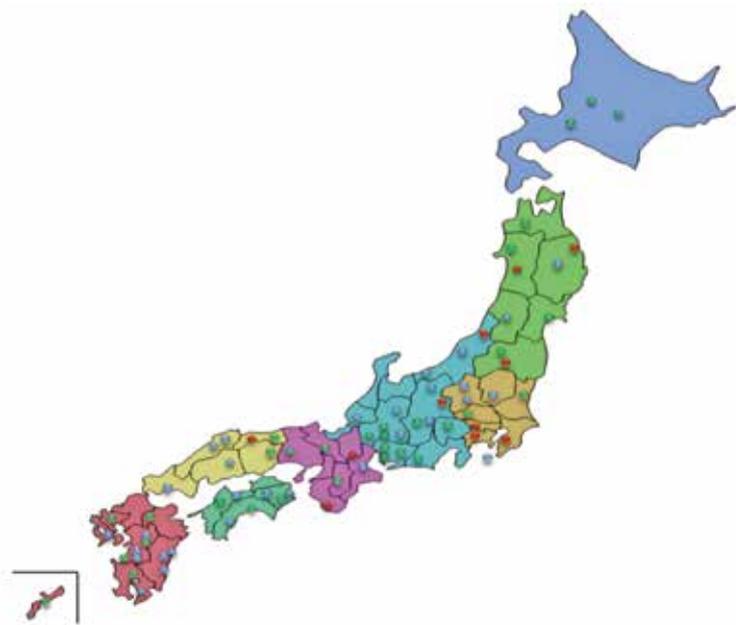


図1 森林について学べる高校の配置

ましよう。森林、林業、木材について学べる農林系の高校は全国で72校あります（平成26年、林野庁資料）（図1）。これらの学校では、森林、林業、木材についての専門教育を通じて、将来の専門技術者の養成や、地域に根差した人材の育成を目指しています。教育目標に「地域産業及び社会の発展に貢献できる人材を育てる」（鳥取県立智頭農林高等学校、「ふるさとで活躍する人間を育てる」（愛知県立田口高等学校）など、地元の地域社会を支えていく人材の育成を謳っている学校も多々あります。こうした学校では、具体的な社会



写真2 高等学校森林科学科が間伐材で製作したバス停待合室

への働きかけとして、高校生たちが手入れ不足の森林の整備を行うボランティア活動や、地元の子ども達への体験活動の指導（写真1）、地元の自然環境調査などに関わったりしています。また、間伐材を活用した製品の製作や施設の設定（写真2）、演習林内への遊具の設置などの活動もあります。さらに、木工科のある養護学校などでは、授業で手づくりされた積み木を誕生祝いとして地域の子どもたちに贈る試みなども行われており（北海道雨竜高等養護学校、木とのふれあいを通じて人と木と森林との関係を学ぶ「木育」への貢



写真3 北海道雨竜町の誕生祝品（北海道雨竜高等養護学校木工科製作）

献も期待されます（写真3）。このように、高校の森林教育では、生徒自らが森林について学ぶ場であると同時に、地元の人々に森林と人との関係を知ってもらう活動を通して、自らが職業人、社会人として成長する場ともなっています。学校における森林教育活動は、忘れかけられた地域での自然に根ざした文化を呼び戻し、若い世代に継承していく機会を作り出します。学校が森林と人々を結ぶ活動の拠点となるといえるでしょう。